

子どもの成長と音楽の関わりについて —地域の音楽活動による支援の実例とその可能性—

The Growth of Children Through Music

(2018年3月31日受理)

廣畑まゆ美 小野 文子

Mayumi Hirohata Ayako Ono

Key words : 子ども, 成長, 音楽, 地域, 活動

要 約

平成29年3月, 新学習指導要領が告示された。平成30年, 幼稚園から全面実施が始まり, 順次小学校, 中学校, 高等学校と続いていく。学習指導要領の改訂のポイントを押さえたうえで, 地域の音楽活動の実例を挙げ, その実践の意義と効果, 可能性と展望について考察する。

1. はじめに (研究の動機)

平成29年3月, 新学習指導要領が告示された。平成30年, 幼稚園から全面実施が始まり, 順次小学校, 中学校, 高等学校と続いていく。中央教育審議会では, この学習指導要領への改訂に向けた審議まとめ(素案)の中で, 現行学習指導要領の成果と課題を以下のようにとらえている。

- ・音楽科, 芸術科(音楽)においては, 音楽のよさや楽しさを感じるとともに, 思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成すること, 音楽と生活との関わりに関心を持って, 生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むこと等に重点を置いて, その充実を図ってきたところである。
- ・一方で, 感性を働かせ, 他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと, 我が国や郷土の伝統音楽に親しみ, よさを一層味わえるようにしていくこと, 生活や社会における音や音楽の働き, 音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては, 更なる充実が求め

られるところである。

平成20年の学習指導要領の改訂においても, グローバル化など社会の動きは大きな焦点となり, 音楽科の授業では, 心と体を使って触れたり感じたりする体験や, 人との関わりを通して, 音楽のよさや価値を実感する活動が重視されてきた。中央教育審議会の改訂に向けた素案では, 今後, 「アクティブ・ラーニング」の視点に立ち, 活動と学びの関係性や, 活動を通して何が身に付いたのかという観点から, 学習・指導の改善・充実を進めることが重要であることが述べられており, 実際, 新学習指導要領では学校だけでは体験できない活動を考え地域に働きかけることが教員の役割の一つとして明記されるまでに至っている。

学んだことが学校だけで完結してしまっていることには課題がある, ということが言われて久しいが, 実際学んだことを応用することは難しい。しかし教員も限られた授業時間の中で, アウトプット方法まで伝えることは多岐にわたりすぎて難しいだろう。新指導要領では外部の力を借りることについて, あまり後ろ向きではない。外部の力を借りながら学びを充実させることは, 地域の格差が生じる原因にもなりかねないが, 子どもたちに

とって新鮮な体験ができる場であると考える。

筆者の一人である廣畑は、香川県香川郡直島町で開催されている「きらめき音楽会」という地域イベントの運営スタッフとして関わっている。直島町は島という特性上、島内全体でイベントや町おこしを運営する心意気がある。また、顔なじみも多いため、コミュニケーションがとりやすい。新学習指導要領に明記される前から、地域で子どもの教育を熱心に考える有志の方が集まって様々な取り組みを行っている。関わった子どもたちの多くは力を身につけ、卒業後それぞれの分野で活躍しており、全国的に知名度を上げる子どももいる。この事例やその他地域の事例を考察し、地域の音楽活動のどのような部分が子どもたちの成長を支援しているのかを考えたい。

2. 研究の方法

学習指導要領の改訂のポイントを押さえたうえで、「きらめき音楽会」の事例を考察し、この活動が具体的に子どもたちにとってどのような影響を及ぼしているか考える。また、全国各地で地域と連携した学びの実践が行われているが、事例を比較研究する過程で、地域音楽活動の実践における効果の共通点を見出し、子どもにどのような支援ができるかについて考察する。今回比較の事例には、岡山県高梁市で長きにわたって続いている「高梁市 童謡まつり」を用いる。高梁市童謡まつり企画運営委員会によって運営されているが、若手への引き継ぎが一致団結して行われており一貫したテーマを追いかけて取り組んだ結果、市のカラーが出てくるようになった事例である。

3. 新学習指導要領の改訂と直島の実践について

平成29年3月告示の新学習指導要領は、平成30年に幼稚園で全面实施され、順次、小学校、中学校、高等学校でも実施される。新学習指導要領の中では「生活や社会」という表現が頻出しているが、今回の改訂の基本的な考え方には、

「現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持したうえ

で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成すること」

と明記されており、より学習の目的が具体的に指示されるとともに、学んだことを確実に実践できる力が求められていることが見受けられる。

教育内容の主な改善項目としては、

- ・言語能力の確実な育成
- ・外国語教育の充実
- ・理数教育の充実
- ・道徳教育の充実
- ・伝統や文化に関する教育の充実
- ・体験活動の充実

などが掲げられており、音楽科でもこの改善項目を受けて、これまでの目標では、「音楽活動を通して、愛好する心情や感性を育てる・基礎的な能力を培う・豊かな情操を養う」という初歩的かつ感覚的なニュアンスで留められていたものが、「音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次の通り育成することを目指す」という明確化された表現となり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう人間性等の3本柱を立て、より詳細に学習目標が記載された。小学校では和楽器を含む我が国や郷土の伝統的な音楽の学習、中学校では生活や社会との関わりを考えていく学習を充実させることが明記されている。2年後に差し迫った東京オリンピック・パラリンピックのような国際イベントを控えてグローバル化が進み、AI（人工知能）の開発における情報化により社会が急速に変化していることが教育内容の改善には大きく影響していると考えられる。新学習指導要領の改訂スケジュールの中にも社会的なイベントの開催が書き込まれており、世の中の動きに注意を払いながら取り組まなければならないことを示唆している。改善項目の中において、子どもたちは、未来の創り手となるために必要な知識や力を確実に備えることが学校教育の中で習得できるよう目指されているが、その中で、以前にも増して「カリキュラム・マネジメント」という言葉とその実践について強く提唱されている。学習指導要領等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に

基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかを検討するかが求められている。限られた授業時間数において、これまで以上を求められる子どもはもちろん、教える学校側にも限界がある。また学校の中だけで得られることには限りがある。カリキュラム・マネジメントの考え方の中には、学校では思いつかなかったような実践的な学びに取り組むために地域をはじめとした外部と連携することも含まれている。教員の役割のもと、子どもたちにはとても刺激的で印象深い体験を習得できる。この考えにおいて、主体的に動くのは学校の役割の一つであることが新学習指導要領の改訂のポイントとして挙げられている。カリキュラム・マネジメントの考え方の中では、主体は学校にあるが、教員がそれを実践する上で、地域が声をかけて巻き込んでいく姿勢を持つことも重要であると考ええる。

人口約3,000人の香川県香川郡直島町はカリキュラム・マネジメントの考え方が定着しているケースモデルであると考ええる。コンパクトなコミュニティであることから、世代を越えて容易にコミュニケーションができ、学校と社会が連携した活動が機能し、長年継続しているものが多い。直島町の小・中学校に赴任してくる教員は大概単身赴任という形をとることに加え、任期は約3年。この3年でいかに地域と関わることが重要であり、事情を暗に知っている地域の方も彼らが町に溶け込むことができるよう積極的に働きかける。地域主導で始まった企画に参加しないか声をかけ、運営に巻き込んでいく。単身であり、夜になると店はほとんど閉まる娯楽の少ない環境であることから、県庁所在地付近の学校と比較すると時間に余裕があるため、活動にも参加しやすい。その過程で様々なアイデアを学校に還元することにもつながり、教員の学びの場にもなっている。地域と学校を運営する教員が密にコミュニケーションをとれる環境であることは、他にはない利点である。

4. きらめき音楽会の実践とその効果

(1) 音楽会について

3章で述べたような環境を生かし、きらめき音楽会とは、2001年から、「子どもたちの夢を育てる種まき事業」となることをテーマに掲げ、直島町に住んでいる有志の

方が中心となり、ボランティアで会の企画・立案・運営等を実践し今日までに至っている。地元直島の小・中・高・大学生の器楽演奏の日頃の成果を発揮する場所になること、音楽への機運を高めてもらうことがねらいである。毎年12月の2週目か3週目に開催されている。約3時間の長丁場ステージではあるが、ステージに上がる人はゲスト含め、直島にゆかりのある人物であるため、聴衆もより音楽を身近に感じることができる。200名定員の客席は、時間によって出入りがあるものの、常に満席状態である。

主催はボランティアで構成された実行委員会であるが、メンバーは直島出身・在住者が8割、直島通勤者が2割の割合で構成されている。構成員は口コミや紹介で広がり、所属は、役場、工業系の企業、サービス関連企業、行政関係、小学校教員、中学校教員など様々であるが、皆、音楽に造詣があることに加え、子どもの成長支援に関わっていく意識を高く持っている。スタッフは完全に裏方に回る人もいれば、出演を兼ねる人もいるので、本番が大変ではあるものの、ステージだけでなくバックヤードへの知識や理解を深めることにもつながっている。直島町教育委員会の後援を受けているが、名義だけでなく、チラシ配布作業の補助、音響機材の貸出・運搬・設置などを手伝ってくれている。

会の運営は音楽会開催の1年前から月1回の会合を行い、プログラムの構成を練っている。町内放送やSNSを活用して参加者の募集をかけているが、自薦の参加者は子どもたちを中心に例年10組以上集まっている。また、ゲストを例年招いており、口笛世界チャンピオンや民族楽器奏者など学校の授業等では見る機会のないプロの奏者を呼ぶことにも力を入れている。

名義や金銭的な援助では、町の教育委員会の後援や、活動への助成金制度があり、活用をしている。直島町北部に広がる工業地帯の企業も、地元活動の応援には積極的で、運営スタッフが株式会社三菱マテリアルを中心とした関連会社を約30社程度周ってほぼ全ての企業が、活動に金銭的な寄付をしてきている。寄付の使途は基本的に運営費用（会場使用料、備品購入、音響等の委託費）に充てられるが、残った費用で中学校や小学校の音楽に関連する備品購入を行い、教育に役立ててもらっている。2017年で開催17年目を迎えた長寿イベントであるが、年

ごとにプログラムは変化している。2014年までは、個人・グループによる発表会形式であったが、2015年はそれに加え、運営を取り仕切るスタッフによってテーマを設けて合同演奏を行った。これまでの会よりも「なぜ」きらめき音楽会が開催されているのか、という意図を明確に持って取り組むことができた。しかし一方で、2015年の会では実行委員会のパフォーマンスが中心になってしまい、子どもたちが主役ではなかった。音楽会の個性を形作るうえで、挑戦したことは大きな飛躍であったが課題は残ってしまった。2016年以降はその課題から、発表会形式のプログラムに加え、各世代、所属の違うスタッフが一堂に集まり、皆で演奏する合唱と合奏の場を設けた。参加が一丸となって音楽会を作り上げる場ができた。そして、2017年はさらにレベルをあげてミュージカルに取り組んだ。普通の暮らしにおいて子どもたちが、自分より半世紀以上年を重ねた人や一企業に勤務している人と一緒に物事を考えたり、演奏したり、議論を行う機会にはなかなか恵まれない。世代を越えて「音楽が好き」という感情を共有しながら、1つの音楽会を作ることができている。このような音楽会を、所属を越えて集まった実行委員会のメンバーがまとめあげて形にしていくのである。学校・企業・行政が三位一体となって演奏に臨み、この場を通してそれぞれの所属を越えて演奏を行うスタイルが徐々に定着している。それぞれのスケジュールを調整し、休日を使って練習に取り組んでいるので、個人の意識が高くないと練習等についていくことができない。ゆえに真剣に音楽に取り組む人が集まりやすく、ある一定のレベル感を担保することができている。



中学生、教師、直島町役場職員、ALT、会社員などが集まって好演したミュージカル「サウンドオブミュージック」。(2017年12月)

(2) 音楽会の効果

(1) で述べたような運営体制の中で音楽に取り組んだ初年度の学生も現時点で30歳を超えているが、その後も音楽活動に積極的に取り組んでいる。当時中学生であった現・副実行委員長の浜村将次氏は、きらめき音楽会での演奏活動で実力を伸ばし、平成17年に香川県で開催されたのど自慢のチャンピオンとなり、2004年のNHKのど自慢チャンピオン大会に出場している。その後も、地元企業で働きながら香川県を中心に数多くのコンサートに出演している。多忙の合間を縫って、きらめき音楽会の会合にも定期的に参加している。同じく開催当初に参加していた高本りな氏は、現在バークリー音楽院に通い実力の研鑽を続けている。映画の主題歌を歌うなど、活躍は目覚ましい。その他、開催当初はピアノが大好きだった小学生が高校生になり、実行委員会へと立候補してきてくれたり、高校生になって音楽関連の部活に入部したり、それぞれの中でここの音楽の体験が役立っている。

浜村氏になぜ現在も活動を続けているのかインタビューしたところ、

「音楽を通して様々な出会いがある。また学生時代は単純に出演側だったが、こうしてバックヤードの経験をすることで、その当時自分たちを支えてくれていた大人たちのありがたみを感じる。自分たちの演奏する場をしっかりと作るとともに、自分たちがしてもらったことをまた次世代にもしてあげたい。当時からの仲間に加え、活動を通して出会った仲間とともにこれからもできる限りのことはやっていきたい。」

という思いを持っていた。浜村氏は、これまで様々な世代とコミュニケーションをとって会を進める過程で、会が関係者の絶妙な関係で成り立っていることを痛感したようである。長きにわたって実行委員長も経験していたので、苦労もあったと思われるが、最終的には人との関わりや次世代への思い、音楽が好きだということがあることにより今日まで活動している。

子どもたちにとってきらめき音楽会は下記のようなメリットがあると考えられる。

- ・ステージの経験が積める。
- ・プロのミュージシャンの演奏を間近で聞くことができる。
- ・さらにはそのミュージシャンと同じステージに立つことができる。
- ・音楽を通じた交流が学校の外にも広がり、知見が広がる。
- ・音楽会の成り立ちを知ることができる（寄付や助成のこと）。
- ・様々な人に応援されていることを知り、感謝の心が養われる。
- ・世代間コミュニケーション能力が身に付き社会性が身に付く。

学校における音楽科の目標はどちらかというと、蓄積していくことに重きが置かれているが、こうした地域との活動を通すことで、学んだことをアウトプットし、さらには評価されるということを意図的に学ぶので、子どもたちにとっても指導する教員側にとっても、まさに実践的な学習となる。

4. きらめき音楽会創始者インタビュー

きらめき音楽会はボランティアで構成された運営組織であるが、創始者は直島町在住の堀口容子氏という人物である。堀口氏は、常に運営会議に出席し、子どもたちのために何ができるか、熱意をもって取り組んでいる。しかしこの活動は完全ボランティアで、開催までの負担も決して少ないとは言えない。しかし17年間続き、さらに発展しようとしている。この活動における堀口氏の思いと、創始者から見る今後の展望などを伺った。

Q 1. 開催の意図

当時「心の相談員」として小・中学校に通っていた折に聞いていた、生徒たちによるアカペラや、ピアノ、歌がとても上手だと思っていた。この子たちに活動の場が何か与えられないだろうか、と常日頃から考えていた。教育委員会による第21回中国・四国地区社会教育研究大会香川大会に参加し、岡山県苫田郡鏡野町の発表で①子どもに失敗させる、②個性を伸ばす、③その人なりに良

く生きる、④学校と家庭、地域との関り（繋がり）を考えることの重要性を学び、直島でも実践させようと思ったのが始まりであった。

直島は人数の規模からクラブ活動等が限られており、男子生徒が楽しめる野球やサッカーはあったが、女子生徒が楽しめる場所がほとんどなかった。これを懸念し、生徒対して「学校の外でやりたいことはないか？」というアンケートを取ったところ、子どもたちには、様々な欲求を持っているが実現できないことが多くあることがわかった。その当時中学生に歌のうまい男の子、ピアノのうまい女の子がいたが、音楽を発表する場所がなかったので、活躍できる場所を作ってあげたいと思った。また、直島ではなかなか文化的な体験をさせてあげることができないので、プロの演奏家の生演奏を聴くことができる機会を作り、音楽に対する夢や希望を持ってほしいと思い、当時流行していたアカペラができるグループを招聘し、憧れの世界を近づけることで更に夢と希望を膨らませようと思ったのが最初のきっかけであった。

Q 2. やっていてよかったと感じること

きらめき音楽会に出演した子どもたちが音楽を今も続けていること。音楽で活躍していること。音楽によって、学校・行政・企業が一体となったこと。

Q 3. 課題

長年実施していく過程で音楽会の在り方が変わっている。出演者が多種多様になる過程で「子どもの教育」に対する気持ちの在り方が低くなることもあるので、常に目線合わせと方針の確認は必要だと思っている。またゲストを呼ばない時期もあったが、直島町内で完結してしまうイベントになってしまうことは避けたい。なぜなら、子どもが島の外の文化に触れることによって、視野を広げてほしい・文化的な良い体験をしてもらいたいと思っているからである。関わる人が増えてくる過程において、常に子どもたちを大切に思う気持ちを、メンバー全員の共通認識にしておきたい。

また、活動は数値化できていない。数字の指標がすべてではないが、目標に対してどのようなことを活動の中に組み込んで実現させることができたか、仮説検証のプロセスはもう少し必要であると考え。音楽会は客観的

にみてどのような出来栄えだったかを確認する手段も現在存在していない。どのような評価がなされているかは、現状直接お声がけいただくか、風評のみなので、改善点が集まりにくい。もう少しどのように伝わっているのか、効果があるのかを定量的に調査していく必要がある。ただ、数字を取りに行くのは目的ではない。取り組む人たちが何を考え、どのような表現をしたいか、ということが、目的通りかどうかを図る指標でなければならないと思っている。

Q 4. 今後の展望

直島のいいところは、地域全体で子どもを育てていくということが昔から定着していて、世代が変わった現在でもその意識が高いところだと思う。この地域全員で臨んでいく体制を引き続き継続させながら、さらなる発展を目指したい。

所属や世代を越えてアウトプットできる場所になったので、その手段を生かして次は何に取り組むか、内容の深化が求められている。社会の変化を感じ取りながら、子どもたちに何ができるかを考え、形にするとともに、協力者を増やしていきたい。

堀口氏の考えには一貫して「子どもたちのために」という思いがある。一貫性のある思いに惹きつけられて、その活動の運営に様々な人が関わり、会が17年継続してきた。直島町という個人の顔がすぐに思い浮かぶようなコミュニティであれば、堀口氏のように地域で熱い思いを持っているキーマンを探しやすいが、核家族化が進み、その土地に代々根差している人が少なくなっている今日、地域との関係は都市部を中心に希薄になる一方である。このように1名のキーマンによって活動が盛り上がる、というのは稀なケースではあると思われるが、人を巻き込みながら活動を続けることにより、その規模が大きくなる可能性はある。また堀口氏は四国新聞の直島通信員である。おりーぶ通信という記事を書いて活動を掲載しているため、香川県での認知は上昇している。また直島町長（2018年3月時点）濱中満氏は音楽に造詣があり、若者のイベントを応援するとともに、自身もギター演奏をして出演している。直島町公式ホームページの町長日記において、活動が詳細に記載され、取り組みは県

内外の方が知るものへと広がりを見せつつある。関係者による広報活動によって、さらに社会性が高まり、子どもたちにとっては貴重なアウトプットの機会になっている。直島という特徴ある地域ならではのケースであるものの、こうした取り組みが他にもないか調べてみた。

5. その他地域における音楽活動の実例 —岡山県高梁市 童謡まつりイン高梁—

岡山県高梁市では、1985年から「童謡のまちづくり」の取り組みがスタートした。これは、このまちづくりの事業の趣旨に賛同する民間団体を中心とする代表者で童謡のまちづくり推進委員会を設置して、活動している。有志の活動ではあるが、継続して活動が続いていくよう実行委員会内の若手育成に力を入れている。イベントは1986年から始まり、2016年の開催で31回目を迎えている歴史あるイベントである。日本童謡協会が1984年に「童謡の日」と制定した7月1日前後に、1日目は著名なゲスト、2日目は地元の合唱団を中心に、高梁市総合文化会館を会場に開催されていたが、2000年度の第15回より1日の開催となり、著名なゲストの出演を取りやめて、県内外から合唱グループを招待して交流するなど、手作りで盛り上げる取り組みになっている。第27回には岡山県出身で高梁市のPR大使の小六禮次郎氏と倍賞千恵子氏を迎えたトークショーなども行われ、童謡というテーマのもと、一貫性を持って地域が絶え間なくアウトプット活動に取り組んでいることが伺える。高梁市といえば合唱というイメージも定着している。2005年までは、高梁市教育委員会が事務局として、まちづくり推進委員会や出演団体の招集や事業資金の捻出、ゲストの交渉、ステージの企画等を行っていた。2006年度からは、出演団体の関係者で運営が実施されることになった。

現在の状態や、学校と地域の関わり方を見ていると、直島に似ているところがある。人口約30,000人の都市において、地元有志が中心となって進行するエネルギーは計り知れないものがあるが高梁市と直島町の大きな違いは、最初に動いた意図であると考ええる。子どもの教育に重きが置かれていることはもちろんであるが、高梁市は行政による初動から、町をいかに特徴づけていくか、という部分からのスタートさせている。約30,000人を束ね

る上では、行政等の大きな力による支援は必要不可欠であろう。一貫したテーマ設定を行政が担ったうえで、志のある団体や関係者に派生していった事例である。コミュニケーションが必ずしも直接行えるような規模間でないところは、そのコミュニケーション内容をどう第三者の協力を得ながら実施していくか、ということの攻略を示している一例である。

こうした地道な活動を通じて、高梁市は現在も合唱の強豪校として県内での地位を保っている。

6. ま と め

様々な事例からわかるのは、学校の外で取り組む活動の印象が、子どもの成長課程でもたらす影響は大きい。

たたしその実践には、学校・社会・行政が三位一体となって実働レベルで協力し合える体制が必要である。

音楽は、学んだことをアウトプットする過程で学ぶことが多い。アウトプットする発表の場を生み出すために、地域と常日頃からいかに関わっていくかは教員が常に考えるべきポイントである。直島のように、音楽会に関わる人たちが、密なコミュニケーションをとりやすい地域もあるが、大半はそうではない。教員は絶えず地域との連携で子どもにプラスの作用をもたらすことを考えるとともに地域で暮らす人々もまた次世代の育成のために何ができるかを考え、できる限り積極的に協力し、コミュニケーションをとっていく姿勢が今後こそ重要であると考えられる。しかしどのようにコミュニケーションをとっていくのか、具体的にしていくことに課題があると考えられる。

新学習指導要領の全面実施を順次迎えるが、学校の中だけで学びを完結させるのではなく、地域で音楽に取り組んでいる学校関係者以外も、何ができるのかを改めて考え行動することが学習指導要領の目指す目標に近づくために必要な要素となると考える。

参考・引用文献／URL

東洋館出版社編集部編『平成29年版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理』東洋館出版 2017年
 文部科学省 小学校学習指導要領解説 音楽編 2008年
 文部科学省 中学校学習指導要領解説 音楽編 2008年

岡山県合唱連盟機関紙トゥッティー 第73号

唯学書房『子育て』環境を創り出す 第5章「文化こそみんなんお心をつなぐー音楽〈歌〉を通したまちづくり」共著：古市久子、澤田節子、矢内淑子他

2008年

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm (文部科学省HP 新学習指導要領)

http://www.town.naoshima.lg.jp/government/mayor/tyoutyou_niltuki/tyoutyou_H29-12.html (直島町公式HP 直島町長の日記)

<https://www.shikoku-np.co.jp/olive/article.aspx?id=20171221000001> (四国新聞おり一ぶ通信 きらめき音楽会)

<http://www.city.takahashi.okayama.jp/> (高梁市HP)

